

新型コロナウイルス感染爆発の中で、 一丸となって生産継続に挑む

フコク東海ゴムインドネシア

2020年1月に中国武漢の封鎖を皮切りに世界を揺るがすことになった新型コロナウイルス感染拡大が、世界中の海外拠点の生産を直撃した。今回は、感染爆発に見舞われた国の中から、インドネシア西ジャワ州に拠点を構えるフコク東海ゴムインドネシア(PT. FUKOKU TOKAI RUBBER INDONESIA)の生産継続に向けた取組みを取材した。

フコク東海ゴムインドネシアは、(株)フコク(東証一部上場)の海外子会社の1つで、自動車用エンジンの騒音や振動を低減するプーリーダンパーや防振関係のスペアパーツ、シール関連のゴム部品を製造している。設立は1997年で、西ジャワ州に3つの工場がある。

今回、オンライン取材に対応いただいたのは、飯島和美社長(写真1)だ。

見舞われた生産の急ブレーキ

インドネシアでの新型コロナ感染は、2020年3月2日に2名の陽性者が出てから、増え続けた。

会社概要

会社名：PT. FUKOKU TOKAI RUBBER INDONESIA
所在地：〈本社〉
JL. INDUSTRI SELATAN 6A BLOK GG
6A-F, KAWASAN INDUSTRI JABABEKA -
CIKARANG, BEKASI JAWA BARAT 17854
INDONESIA.

設立：1997年
従業員数：485名(2021年6月時点)
事業内容：プーリーダンパー、各種防振製品、シール
部品の製造

フコク東海ゴムインドネシアの外観

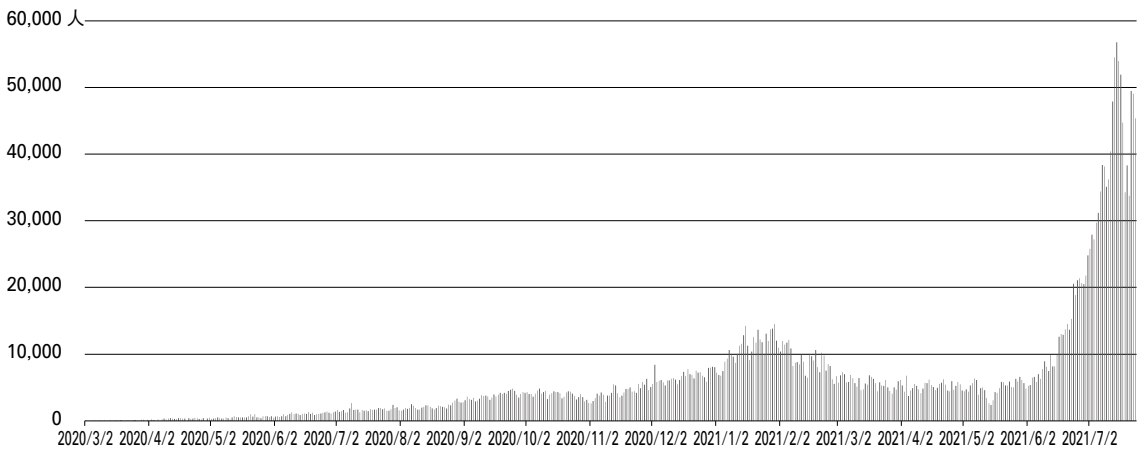


新型コロナ感染による急激な売上ダウンに見舞われたのは、2020年4月からだった。ジャカルタ州および西ジャワ州の各知事から、コロナ禍によ

写真1 飯島和美社長



図1 インドネシアの新型コロナ感染者数推移



る大規模社会制限の実施が発令され、企業は軒並み操業を停止。主要な納品先からは、当初の1週間の停止予定から、さらに1週間停止を延長という通達が来る状況で、4月の生産は前年から6割以上落ち込むことになった。5月になると事態はさらに深刻になり、前年から9割の生産ダウンに陥った。ほとんど生産ができないという状況だ。その後、少しずつ需要は回復したものの、前年比では3割～4割の生産という状況が続いた。

多くの企業が赤字とともに、在庫増で資金繰りが苦しくなる中、同社は飯島社長がキャッシュフローにこだわった経営を指揮されてきたことから、大幅な生産減にもかかわらず、在庫もわずかな増加に抑えた。さらに投資の抑制、大幅な固定費の圧縮などで赤字ながらも資金面では無借金経営を続けることができた。

感染爆発で多くの従業員が感染

2021年になり、売上高は通常に近い数字に戻ってきた。しかし、ここで今まで経験したことのない非常事態に見舞われたのだ。インドネシアでの感染者数は3月にはいったん減少傾向にあったものの、デルタ株の拡大とともに、6月中旬以降は一気に増加。1日当たりの感染者数は3月では5,000人前後だったが、7月中旬には5万人を大きく超える事態になった(図1)。それまでは従業員の感染は抑えられていたが、とうとう従業員の

にも感染者が続出する事態になったのだ。社内での感染対策は徹底していたが、結婚式などへの参加者や葬儀に参列した社員が感染。中には結婚式を挙げた本人が感染したという例も出てしまった。

感染者だけではなく、濃厚接触者や感染が疑われるメンバーは自宅待機としたことから、6月下旬には、陽性者、接触者、自宅待機者を合わせると、出勤できない社員は数十名にも上った。

社内では、感染対策会議を行い、クラスターを発生させないための対策とともに、欠勤者が多い中で、どのようにして事業を継続するかを検討。また、感染者の健康状態を電話でフォローすることも行った。

自宅待機の感染者がリモート対応

その結果、出勤できない事務所部門の陽性者や自宅待機のスタッフから、在宅で仕事をしたいとの申し出があり、自宅にパソコンをセッティングし、在宅で業務を遂行することになった。事務所に出社しないとできないことは、事務所に出勤できている人事や経理、購買のメンバー(写真2)がバックアップに回ることで、業務に支障が起きないように全員で危機管理体制を整えた。

このようなことが実現できたのは、ITチーム(写真3)の環境セッティングの速さと、在宅組と出社組の見事な連携があったからだった。